



北方民族博物館だより

No. 104



D28.8.2 ギッチン運営委員会Tシャツ ギッチン／アラスカ／2009年製作

アラスカ州北東端に位置する「北極圏国立野生生物保護区」は、アメリカ合衆国最大の野生生物保護区であり、ギッチンの伝統的な生活地域に隣接している。1988年、この地域での石油天然ガス開発計画が発表されると、ギッチンは、この開発が野生トナカイの繁殖やギッチンの生活に悪影響を与えうると主張し、開発反対運動を開始した。ギッチン運営委員会は開発反対運動の主導組織であり、このTシャツはその設立20周年を記念したものである。エネルギー開発に意欲的なトランプ政権の発足に伴い、今後の動向が注視される。

目次 Contents

- 1 表紙 ギッチン運営委員会Tシャツ
- 2 ロビー展「北で編まれるバスケット」
／ロビー展「東京農業大学学術情報課程実習成果展示—食べられる虫たち」
- 3 ロビー展「オホーツクシリーズ⑩ 北の状景から」
／講座「海外所蔵写真で見る明治時代のオホーツク」
- 4 講習会「はじめてのウイルト刺繍」／講座「網走湖と世界の氷下漁」
- 5 企画展「ボREALフォレストの狩猟民—アサバスカ・インディアンの暮らし」
／講座「ビーバーってどんな動物？—動物園の現場から」
- 6 INFORMATION



ロビー展

北で編まれるバスケット

2016. 10. 29-11. 27

南のイメージの強いバスケットですが、北方民族も身近な素材から数多くのバスケットを作ってきました。バスケットは実用品として使われるのはもちろんのこと、美しく装飾を施され、生活を彩ってきました。さらに交易品にもなっていました。

バスケット編みの基本的な技法は①組み技法、②巻き技法、③もじり技法の3種です。この3つの技法を用いて、素材の違いや、間隔、編みの強弱や装飾により、さまざまなバリエーションのバスケットが作られていました。

バスケット作りにはある程度の長さのある植物が用いられました。短いと作業のなかで頻繁に継ぎ足す必要があるからです。草、木、樹皮、木の根がバスケット作りには最適の素材でした。特に海岸の砂地にはえるハマニンニクはアイヌ、コリヤーク、アリユート、エスキモーなど北方諸民族の間で広く使われていて、独特の光沢が特徴になっています。このほか木綿糸や漁網用のナイロン糸が用いられたものも作られています。

バスケットの文様は、素材の自然の色や、ベリーや合成染料を用いて染めた素材を巧みに組み合わせられてきました。エスキモーの間では、染めたアザラシの腸が、アリユートの間では染めた鳥の羽根が用いられたほか、毛糸も装飾に使われました。アサバスカ・インディアンは、バスケットの装飾にヤマアラシのとげ(クイル)を用いました。

本ロビー展では、素材や技法、用途や民族別に約60点のバスケットを紹介しました。



会場ようす

(学芸グループ 笹倉 いる美)

ロビー展

東京農業大学学術情報課程実習成果展示
食べられる虫たち

2016. 12. 3-18

網走市内にある東京農業大学オホーツクキャンパス学術情報課程で学芸員資格の取得を目指す3年生38名による実習成果展示を開催しました。本展示を当館で開催するのは今年で6回目となりました。

今年学生たちが選んだテーマは「食べられる虫たち」。展示の導入部から、昆虫が原材料の一部に使用された食品添加物を紹介し、私たちに馴染みの食品にも「虫」が隠れていることを印象づけました。

「日本語の蟲・虫・むし」というコーナーでは、「虫」の分類について紹介しました。日本ではかつて生き物を鳥、獣、魚と分け、それ以外を「虫」と呼んでいました。現在でも他の生物に寄生する動物を寄生虫と呼ぶことや、カタツムリを「でんでんむし」という言い方、「蛙」「蛇」「蛤」「蝙蝠」といった漢字の部首などに、かつての分類の名残が見られます。

また漢方薬のなかには植物だけではなく、昆虫や、上述の伝統的な分類でいうところの「虫」を原料としたものもあります。このように、食品ばかりでなく医薬品も視野に入れ、そして「虫」の概念を広く捉えれば、私たちが普段から知らず知らずのうちに「虫」を口に入れていることに気づかされます。

現代の日本で昆虫を昆虫と意識して食べているのは一部地域に限られますが、世界に目を広げるとさまざまな昆虫食があります。本展示では「世界の昆虫食マップ」が紹介されたほか、インターネットで販売されている昆虫スナックの実物をケース内に展示し、そして学生4人が昆虫スナックを試食する映像も紹介されました。

最後に、世界の食糧問題の解決策の一つとして、生産コストの低さと栄養価の高さで昆虫食が注目されていることが紹介されました。しかし、現代では文化的に受け入れられない人もいたり、食品としての安全性が確かめられていない場合もあることなど、昆虫食普及の問題点も挙げられました。

本展示では写真やイラストの入った解説パネル、手作りの模型やマップのほか、来場者がシールを貼って投票するコーナー、クイズ、手にとって閲覧できる「虫」辞典や参考図書コーナーなども設けられました。来場者に見せるばかりでなく考えさせるための工夫が感じられる展示でした。

(学芸グループ 山田 祥子)



会場ようす

ロビー展

オホーツクシリーズ⑩
北の状景から

2017. 1. 7-1. 26

北方民族博物館では、北海道・オホーツク地域の文化的活動を紹介する展示「オホーツクシリーズ」を続けてきました。記念すべき第10回目となった今回は、この時期恒例となった写真・映像作品展「北の状景から」を開催しました。

オホーツク地域は、春夏秋冬、一年を通して、人びとを引きつける被写体にあふれています。「北の状景から」展では、これまで地域で活動するアマチュア写真家の作品で、自然、農村風景、人びとの表情など、この地域ならではの状景を紹介してきました。今回は、宮崎健氏、小西正敏氏、森田洋行氏、川島宏司氏、村井透氏の5名の方々に、それぞれの写真作品を6点ずつ出展いただき、計30点を展示しました。

本作品展の出展条件は、「オホーツク地域で撮影されたもの」ということだけで、あとはまったく自由とさせていただきました。そのため、さまざまな被写体をそれぞれの感性でとらえた多種多様な作品が集まりました。たとえば、海や湖などの雄大な風景をさまざまな時間帯の微妙な明るさの中で描き出した作品、あえてモノクロで構図や陰影を際立たせた作品、野生動物の威厳に満ちた、またちょっと微笑ましい姿をとらえた作品、様々な表情を見せるオホーツクの空や雲を映し出した作品、管内の観光名所を独自の視点からとらえた作品、人々のちょっとしたしぐさや躍動感を表現した作品などです。

特に今回は、これまで多かった自然や農村の風景だけでなく、町や人物を被写体とした作品も展示することができ、オホーツク地域の全体像を紹介することができたのではないかと考えています。

(学芸グループ 中田 篤)



展示写真：「ハイチーズ！」(撮影：森田 洋行氏)

講座

海外所蔵写真で見る
明治時代のオホーツク

2016. 12. 10

講師 宇仁 義和氏(東京農業大学嘱託准教授)

本講座では、米国に所蔵されている写真や旅行記により、19世紀終わりから20世紀初めの日本および海外領有地の風景や人びとの暮らしを紹介いただきました。当時の日本はまだ探検される側にあり、海外から地理学者や民族学者、野生物学者が相次いで訪れていました。そのような学者たちのなかに、米国のロミン・ヒッチコック(1851-1923)やロイ・チャップマン・アンドリュース(1884-1960)もいました。本講座では、この二人に焦点が当てられました。

R.ヒッチコックは米国の化学者・文化人類学者で、1888(明治21)年8月にアイヌの民族学的調査のため色丹島・択捉島や北海道のオホーツク海沿岸を旅行し、調査地のようすを撮影・記録しました。その行程には網走も含まれています。宇仁氏は、米国でいくつかの機関に所蔵されているヒッチコックによる写真の原板や旅行記を実見調査し、これまで刊行された報告書だけではわからなかった被写体の内容や撮影場所を明らかにしました。ヒッチコックの写真は、道東のアイヌの物質文化や姿を伝える貴重な文化遺産です。また、現在の景観や環境の原点を考える素材としても有効であると述べられました。



宇仁 義和氏

R.C.アンドリュースは、1920年代にモンゴル・ゴビ砂漠の恐竜を発掘し、後に映画の主人公インディ・ジョーンズのモデルになったことで知られる探検家です。アンドリュースはアメリカ自然史博物館の学芸員だった1910(明治43)年に日本を、1912(明治45)年に朝鮮を訪れて捕鯨調査を行いました。彼もまた、調査地周辺の景観や町並み、人びとの日常の暮らしや表情を写しています。

本講座でスクリーンに大きく映し出されたヒッチコックやアンドリュースの写真はとても鮮明で、100年以上前のものとは思えないほどでした。そして、講師が一枚一枚の写真について詳らかに解説してくださったので、当時のようすをありありと感じることができました。

写真紹介の合間に紹介された、これらの写真や旅行記の所蔵状況も興味深いものでした。貴重な資料を保管・整理する博物館やアーカイブの重要性を確認させられました。

写真紹介の合間に紹介された、これらの写真や旅行記の所蔵状況も興味深いものでした。貴重な資料を保管・整理する博物館やアーカイブの重要性を確認させられました。

(学芸グループ 山田 祥子)

講習会

はじめてのウイルタ刺繍

2017. 1. 21

講師 フレップ会

網走市のウイルタ刺繍サークル・フレップ会の会員9名を講師に迎え、初心者向けのウイルタ刺繍講習会を開催しました。

ウイルタというのは、サハリン（樺太）の先住民族です。フレップ会は、戦後網走に移り住んだウイルタの一人である故・北川アイ子さんから伝統的な刺繍を学び、1984年に発足しました。その後も北川さんのつくったウイルタの文様の型を受け継ぎ、刺繍の技術を伝えてきました。現在も網走の女性たちを中心に集まって刺繍をしたり、市民講座を行ったりと精力的に活動しています。当館でも、フレップ会から寄贈いただいた作品を常時ロビーで展示しています。



講師の指導を受けながら
慎重に針を運ぶ参加者

本講習会では、ウイルタ刺繍の基本として、渦巻き文様の刺し方を学びました。最初に刺繍糸の2本取りで、フェルト地の中央に渦巻きの本体部分を刺していきます。参加者は、チェーンを2列並行させるような網目の作り方や、玉留めも玉結びもしないでステッチをつないでゆく方法に慣れるまで、一針一針思案しながら刺していました。

しかし、講師が一人ひとりに付き添うように丁寧に教えてくださったので、しだいに順調に刺せるようになりました。

渦巻きの本体部分ができたら、絹小町糸でその端を刺繍します。まず外側の端を刺し、次に別の色の糸で内側の端を刺しました。本体部分と違って端の部分は一般的なチェーンステッチと同じなのでやり方を覚えやすいのですが、細い絹小町糸で鎖目の大きさをそろえるのには気を遣います。参加者は集中して慎重に針を運んでいました。

最後に、文様入りのフェルト地をコースター、ピンクッション、チャームに仕上げる方法を紹介いただきました。アレンジの仕方を考えるのも刺繍の楽しみの一つです。

ウイルタ刺繍では、文様の曲線をいかに美しく描けるかが肝心だそうです。繊細さを要する作業ですが、講師の方々が明るく優しくご指導くださったので、和気藹々とした雰囲気の中あつという間に時間が過ぎてゆきました。

(学芸グループ 山田 祥子)



参加者の作品（コースター）

講座

網走湖と世界の氷下漁

2017. 1. 29

講師 吉田 睦氏（千葉大学教授）

北方地域の氷下漁^{こおりしたりゅう}を研究している吉田睦氏にお越しいただき、網走湖を含む日本と世界の氷下漁についてお話しいただきました。講師の吉田氏は、西シベリア北部に暮らすネネツという民族の文化研究を専門とされる文化人類学者ですが、数年前より日本国内における氷下漁の研究にも携わってこられました。今回の講座は、氷下漁の調査をおこなうために網走を来訪された機会に、その成果の一部をお話しいただいたものです。



吉田 睦氏

「氷下漁」とは、河川や湖沼が氷結する時期に、氷上でおこなう漁です。世界的には、北半球の寒冷地であるユーラシア大陸北部（シベリア等）、北アメリカ大陸北部（アラスカ、カナダ北部等）などで、刺網、曳網、定置網などを使った氷下漁がおこなわれてきました。一方、日本では、長野県の諏訪湖（明治時代に禁止・廃絶）、秋田県の八郎潟（昭和30年代に干拓事業により廃絶）などでおこなわれたという記録が残っていますが、現在は、青森県の小川原湖のほかは、北海道東地方の湖や沼（網走湖、能取湖、サロマ湖、風蓮湖、温根沼^{おんねとう}など）が中心となっています。

網走湖では、おもにワカサギを狙った氷下曳網漁が実施されています。これは、大正期に秋田県八郎潟より技術移転されたものと考えられます。当初は馬や人力巻き上げ機を使って網を曳いてきましたが、昭和30年代からボールローラー（漁船用揚網機）の転用によって省力化されるようになりました。例年1月（上・中旬）より3月まで操業されています。また、同じく網走市の能取湖では、「ふくべ網」と呼ばれる定置網が使われています。

特に氷下曳網漁については、網の仕掛け方がかなり複雑なのですが、図や動画も活用しながら丁寧に説明してくださり、参加者も満足していた様子でした。

(学芸グループ 中田 篤)

企画展

北 米 針 葉 樹 林
ボレアルフォレストの狩猟民
アサバスカ・インディアンの暮らし

2017. 2. 4-4. 2

今回の企画展では北米の亜寒帯に暮らす先住民、アサバスカ・インディアン（北方アサバスカン）の文化について紹介しています。

北米のおおよそ北緯50度より北側一帯、内陸アラスカからカナダに渡る広大な領域にボレアルフォレスト（北方針葉樹林）が形成されています。アサバスカ・インディアンはこの地域に長年にわたり居住してきました。

アサバスカ・インディアンは、言語によって20以上のグループに分けられます。生活する地域の自然環境により、利用する主要な動植物に違いも見られますが、アサバスカ・インディアンは基本的に、ボレアルフォレストの動植物を利用する狩猟採集民でした。狩猟や漁労は現在でも、現地社会で重要な役割を担い続けています。

展示の前半ではボレアルフォレストの自然と狩猟・漁労活動を動物の毛皮、植物標本、狩猟具、漁労具を通じて紹介しています。またボレアルフォレストに暮らす動物たちの写真と、その動物に関するアサバスカ・インディアンの神話などを多く展示しています。動物が人間のように話し、生活する神話はアサバスカ・インディアンと自然との関係をよく示しています。

スライドコーナーでは現地で人類学的調査を行っている山口未花子氏、近藤祉秋氏の写真を投影しています。

展示の中盤は服飾文化について紹介しています。極寒の地で暮らすアサバスカ・インディアンにとって衣服や手袋、靴はとても重要なものでした。こうした服飾品の多くはビーズなどで装飾されています。来館者の中には狩猟者であるアサバスカ・インディアンの衣服に可愛い花柄のビーズ刺繍が施されていることに驚いた方もいたようです。

展示の後半は工芸文化について白樺樹皮細工、ビーズ細工、様々な素材などから紹介しています。アサバスカ・インディアンはボレアルフォレストの様々な素材を使って豊かな工芸文化を生み出しました。こうした工芸品は現在でも盛んに製作されており、社会/経済的、精神的に重要なものとなっています。



会場のような

(学芸グループ 野口 泰弥)

講座

ビーバーってどんな動物？
動物園の現場から

2017. 2. 5

講師 北村 健一氏（東京動物専門学校校長）

企画展関連事業として、東京動物専門学校の北村健一氏を迎え、ビーバーの生態と動物園での飼育事例について紹介いただきました。アメリカビーバーは毛皮獣として高い経済価値を持ち、アサバスカ・インディアンも毛皮交易期から現代にかけて、盛んに捕獲している動物です。企画展で紹介している資料にも、素材としてビーバーの毛皮が使われているものが多数あります。

北村氏によるとビーバーは日本中の動物園で飼育されているようで、北海道内では釧路市動物園、おびひろ動物園、札幌市円山動物園で見学することが出来ます。ただし夜行性動物のため日中、活動している姿を見るのはなかなか難しく、午後三時以降がオススメであるそうです。

ビーバーはげっ歯類の中でカピバラに次いで2番目に体重が重く、30kgを超すこともあります。オスの睪丸こうがんは普段は体内にあるため、外見だけではオス/メスの判断をつけるのが非常に難しい動物でもあるそうです。

自然界におけるビーバーは非常にバラエティーにとんだ行動を示す動物であり、家族単位の生活、複雑なコミュニケーション・システム、ダムと巣の構築など、人間と比類するような活動を行います。

ビーバーが木の枝を利用してダムや巣を造ることは有名ですが、動物園でも木の枝などを与えて、ビーバーに巣を造らせています。自然界ではこのようなビーバーの構築物は周囲の環境に影響を与えています。アラスカではサケの遡上を助けるために人間が意図的にビーバーのダムを壊すこともあるようです。



北村 健一氏

お話しの中で甲府市遊亀公園動物園で生まれたビーバーの子どもたちの「子育て日記」の話が大変印象的でした。2016年に生まれた5匹の子ビーバーたちは2匹が親元に残され、3匹が人工飼育になりました。北村氏によれば、種によって母親の乳首の形状や大きさが異なるため、動物園で人工飼育を行う場合は、動物ごとに適切な哺乳瓶ほにゅうびんを探すことに苦労するそうです。この動物園では試行錯誤の結果、人間の赤ちゃん用の哺乳瓶を使って、授乳することに成功したそうです。

この他に、北村氏は動物園についても詳しくご紹介してください、普段なかなか聞くことが出来ない動物園の舞台裏について、分りやすく解説してくださいました。

(学芸グループ 野口 泰弥)

ロビー展：寄贈資料展

- 会期：2017年4月15日(土)～5月25日(木)
- 会場：北方民族博物館：特別展示室
- 主催：北海道立北方民族博物館



北西海岸インディアンの仮面
(アラスカ州政府日本支局寄贈)

移動展：カナダ・イヌイトの版画たち ～北海道立北方民族博物館所蔵展～

カナダを代表する芸術の一つに、極北の先住民、イヌイトが作る版画があります。「ハンターにしてアーティスト」であるイヌイトの人びとが作る版画は、豊かな造形や色彩の中に、狩猟や神話世界の伝統が描かれています。

- 会期：2017年4月22日(土)～5月14日(日)
- 会場：北網圏北見文化センター
- 主催：北網圏北見文化センター
北海道立北方民族博物館

北海道立北方民族博物館研究紀要 第26号目次

〈研究ノート〉

- ◆狩猟具に宿る威信—18世紀末～20世紀前半におけるアサバスカン社会のナイフ使用について／野口泰弥・近藤祉秋
- ◆サハ共和国アルダン郡におけるエベンキのトナカイ牧畜／中田篤

〈調査報告〉

- ◆骨角器の分析による4,000年の文化変化—アラスカ州ホットスプリング遺跡再考(前編)／梶田光明
- ◆木村捷司が描く樺太・オタスの北方民族—その背景と人々(2)網走市立美術館所蔵作品より／古道谷朝生・笹倉いる美
- ◆網走市能取岬西岸遺跡a地点発掘調査報告／種石悠
- ◆ウイルト語調査報告—北部方言の文例(3)／山田祥子

〈資料紹介〉

- ◆謝遂『職貢図』満文解説訳注—アムール流域とサハリンの諸民族を中心に／増井寛也
- ◆阿寒 藤戸竹喜氏製作の木彫り作品について／内田昌宏

〈資料〉

- ◆のるりすと 2016—北方研究データベース／笹倉いる美

INFORMATION

行事報告

◆12月27日(火)、札幌交響楽団の市川ヴィンチェンツォ氏、小林美和子氏、荒木聖子氏、猿渡輔氏をお招きし、「ロビーコンサート2016 ～青少年のための室内楽の夕べ～」を開催しました。



演奏者の皆さま

◆1月7日(土)、はくぶつかんクラブ「ステンシルで北方デザインのバッグ作り」(講師：山田祥子学芸員)を開催しました。



ステンシルを体験する参加者

◆1月14日(土)、はくぶつかんクラブ「ビーズ織り」(講師：本間由美解説員)を開催しました。



ビーズ織りを体験する参加者

◆1月28日(土)、はくぶつかんクラブ「あつあつの蒸し餃子・モンゴルの『ポーズ』作り」(講師：中田篤主任学芸員)を開催しました。



ポーズを作る参加者

◆2月11日(土・祝)、「開館記念感謝DAY!」を開催し、トナカイふれあい体験、北方モチーフ簡単マグネット作りなどを行いました。また、未夢の会の皆さまにより紙芝居と絵本の読み聞かせを行いました。

◆2月18日(土)、講座「サハリンの石油・天然ガス開発と先住民」(講師：山田祥子学芸員)を開催しました。



トナカイとふれあう参加者
(開館記念感謝DAY!)

出版報告

野口泰弥学芸員が「場所請負人野口屋又蔵の実像と白老場所の実態研究」(公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 平成28年度研究助成事業研究成果報告書)を発行しました。

北方民族博物館だより
No. 104

平成29(2017)年3月17日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会